



## 構造化の実践に向けたQ&A

3つの構造化（物理的な構造化、時間の構造化、活動の構造化）を行うことによって、自閉症の児童・生徒が活動への見通しをもちやすくなり、主体的に取り組めるようになります。ここでは構造化を実践するにあたって、疑問となりそうな事柄をQ&A形式でまとめました。

### Q1 なぜ「構造化」が大切なのですか？

**A** 自閉症の児童・生徒は、社会性の困難さや、コミュニケーションの困難さなどがあります。特に、言葉による説明だけでは、何を説明されているのかが、分からない場合があります。

構造化とは、場所・時間・活動の内容や状況を視覚的に分かりやすくするための工夫です。例えば、着替えは、言葉で説明するよりも、着替える場所を決めておくだけで、着替えはここですのだからと児童・生徒は理解でき、主体的に活動するようになります（物理的な構造化）。次の時間は何をするのかということも、教師から言葉だけで説明されるよりは、活動内容の示された絵カードとともに説明された方がより理解することができます（時間の構造化）。活動の手順についても、授業の始めに言葉で一通りの説明をされるだけよりも、活動する順番が手順表などで示されていた方が分かりやすいです（活動の構造化）。自閉症の児童・生徒の困難さを理解し、得意な部分に視点をあてた学習環境づくりが基本になります。

### Q2 限られた教室のスペースでどのように構造化の工夫ができますか？

**A** 全体で学習する場所、個別で学習する場所など、児童・生徒のいすを移動させて、場所を変えることで、学習形態の違いなどを明確にしていくことができます。

また、児童・生徒の、生活の動線にそった形で、活動場所や持ち物の置き場を明確にしておくことも構造化の工夫です。例えば、洗面台のそばに歯ブラシやタオルを置いておくようにすることなども、日常的に自然に行っている構造化です。



いすを移動することで、学習の場を変えている例

### Q3 高学年になるにしたがい、つい立は必要なくなるのですか？

**A** 児童・生徒の成長や発達に応じた環境の構造化も適切に変えていかなくてはなりません。しかし一方で学年、学部が変わったからといって、児童・生徒の状態にかまわず構造化を止めてしまうことは、児童・生徒の理解のための手がかりがなくなってしまいます。校内で基本的な考えを統一していくとともに、児童・生徒の実態をしっかりとらえて段階的に外すなどして、児童・生徒の負担に配慮していくことが大切です。

また、小・中学部段階での取組を高等部等に引継いでいくことも重要になります。

### Q4 掲示したいものが多くあり、黒板が分かりづらくなっています。どのように整理し、配置したらいいですか？

**A** まず、全体として必要なもの、個別に必要なものなど、掲示物の情報を整理することが大切です。掲示物が多すぎて、何が大切か分からなくならないように、掲示物は、必要最小限にとどめましょう。

最も注目してほしい「スケジュール」等は、児童・生徒の視線の高さや操作性、分かりやすさに配慮して、黒板とは別の掲示板にする方法もあります。



注目しやすいようにスケジュールボードを黒板から独立させた例

### Q5 音などの感覚の過敏性に対してはどのような配慮が必要ですか？

**A** 聴覚の過敏性に対しては、児童・生徒一人一人の状態に応じて、音量や音の種類、言葉での話しかけ方に配慮するほか、防音ヘッドホンや耳栓で外界の音をコントロールする方法もあります。

視覚の過敏性に対しては、空間を仕切るつい立等で不必要な情報を遮断する方法があります。

保護者と十分に共通理解を図ったうえで、個別指導計画を基本にして、指導に取り入れることが大切です。

また、味覚や嗅覚にも特異性がみられることがあります。「偏食」も味覚や嗅覚、視覚の特異性から起こることもあるので、少しずつ慣らしていくことで改善される内容であるかどうかを、保護者や主治医などと十分に相談した上で指導をしていくことが必要です。

### Q6 自閉症の児童・生徒で学級を編成する場合の基本的な考え方を教えてください？

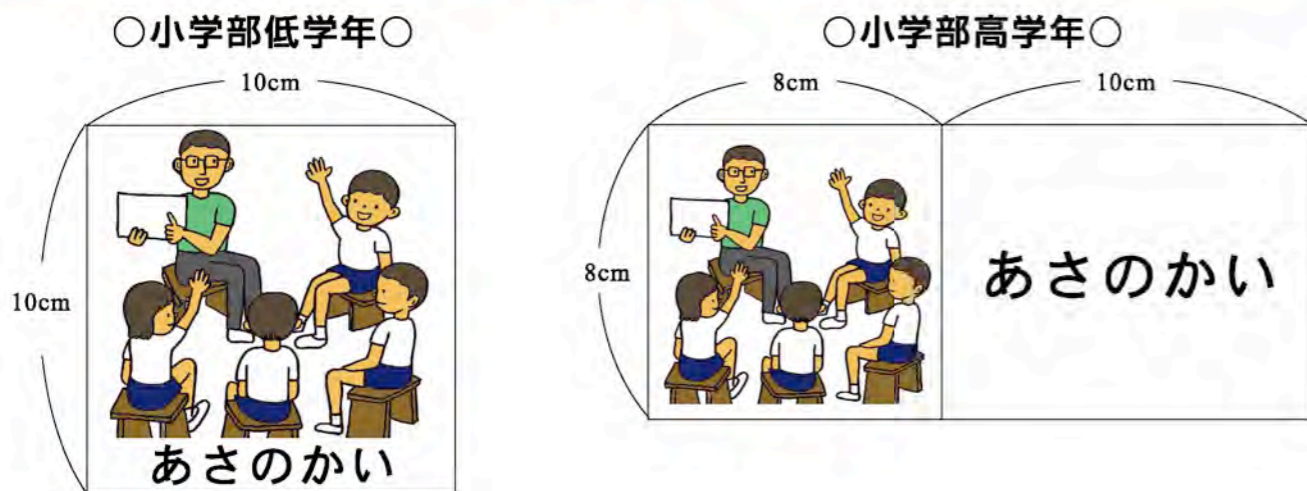
**A** 自閉症の有無にかかわらず、児童・生徒の行動等から障害の状態を判断する評価や発達プロフィール、行動観察、保護者からの情報などを参考にし、その児童・生徒にとって自閉症の教育課程がより適しているかを検討しながら学級を編成していきます。編成に当たっては、保護者の理解を得ることが大切です。



# 絵カード図案集 (1)

授業カードは、全体のスケジュールだけでなく個別のスケジュールを提示するときにも活用します。場所カードは、教室の前に提示したり、授業カードの横に掲示したりします。授業カードや場所カードは、学校で統一して使用することが環境づくりとして必要です。ここで例示している図案を参考に、各学校で活用を検討し、学校で統一した絵カードを作成してください。

## ■ 授業カード (おおよそのサイズです。)



## ■ 授業カード例 (小学部)

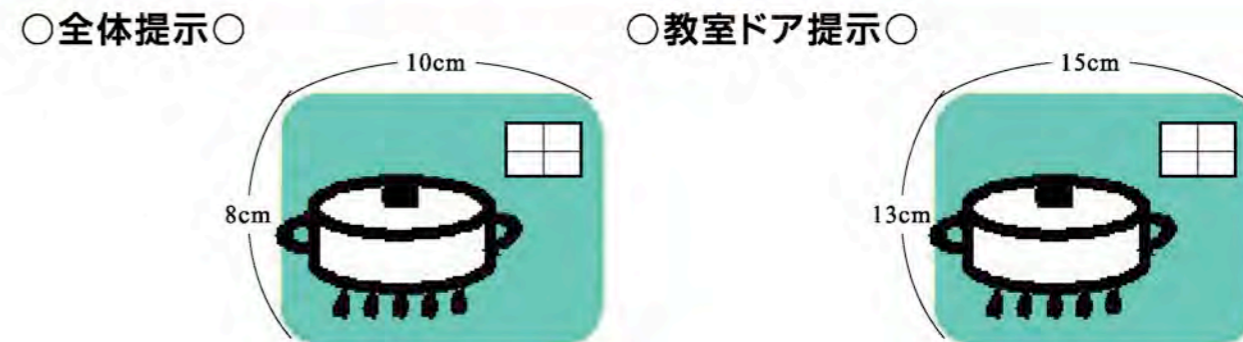


## ■ 授業カード例 (中学部)



(財) 日本規格協会発行 JIST0103 : 2005 「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則」より引用

## ■ 場所カード (おおよそのサイズです。)



## ■ 場所カード例



クラスごとの表示にシンボルマークを入れると、児童・生徒の場所の理解を促すのに有効です。



## 絵カード図案集 (2)

活動に見通しをもたせるために、教材・教具を工夫したり、視覚的なコミュニケーションの仕方を工夫したりすることも大切です。

とうげいしつ	ちょうりしつ	おんがくしつ	こうてい
しちょうかくしつ	びじゅつしつ	プール	ぎじゅつしつ
ほけんしつ	しょくいんしつ	じむしつ	たいいくかん

### ■ 要求カード (おおよそのサイズです。)



ほしい	やめて	たべる	わからない
あつい	さむい	あたまがいたい	おなかがいたい

## 絵カードについて

児童・生徒の理解度に応じた写真カードや絵カードを準備しましょう。分かりやすさの順番は、以下の通りです。

具体物 → 切り抜き写真 → 写真カード (背景なし)  
→ 写真カード (背景あり) → イラスト → 文字つき など

授業カードとして使用するものは、児童・生徒の一人一人の理解度にあわせて、内容を端的に表す簡素なイラストやシンボルを用いて、学校全体で統一していくことが大切です。

活動場所の写真、使う教材の写真、単元や題材のイメージの絵、担当教師の顔写真、実物や文字などの情報を、補助的に提示するとより分かりやすくなるでしょう。

特別教室の表示等も報告書で紹介している図案等を活用して、学校の中で統一していきます。

写真カードや絵カードのどこの部分に注目すればよいのかを、段階的に指導していくことが必要です。自閉症の児童・生徒は、全体を見るのではなく、カードの細かい部分に注意して見ていることがあります。児童・生徒一人一人の見え方の特徴をとらえて、カード等を活用していきましょう。

絵カードの大きさや材質について

- ・教室に提示するスケジュールカードは少し離れた所からも見える大きさ (A6用紙程度)。
- ・個別に使用するカードは持ち運ぶのに便利な大きさ。
- ・ちぎれない、曲がらない、水に強い、色があせにくいなど、ある程度の耐性を考慮。(ケントボードなどは比較的加工がしやすく便利です。木製のカードは耐久性が高く、長く使用する場合に適しています。)

## 本報告書に掲載されている内容について

東京都では、平成22年度までに、小・中学部のあるすべての都立知的障害特別支援学校において、自閉症の学級を編成し、自閉症の教育課程を実施します。

この報告書に掲載している学習環境は、学校として取り組むべき標準的なこととなります。

物理的な構造化、時間の構造化、活動の構造化の3つのポイントを押さえ、自閉症の児童・生徒の得意な部分に着目した系統性のある指導を行っていく必要があります。

本報告書は、小・中学部段階での自閉症の児童・生徒の学習環境の充実について述べていますが、高等部においても、小・中学部段階で行われてきた自閉症の児童・生徒への配慮事項を発達段階や社会的自立を考慮しつつ継続する必要があります。個別指導計画を柱としながら、中学部や高等部に進学する際の引継ぎを確実にし、自閉症の児童・生徒が見通しをもち、主体的に学習できる環境を整えていくことが求められます。

東京都教育委員会

## 「得意」を生かす

自閉症の児童・生徒が得意とするところは、授業の中でどんどん生かしましょう

### 繰り返しの活動で習得する方が得意

自閉症の児童・生徒の多くは、繰り返しの活動を通して学ぶことが得意です。スケジュール等を理解し行動できる児童・生徒は別として、毎回活動内容が変わると、活動への見通しがもてなくなり、不安になってしまいます。繰り返しの活動の中で、少しずつ新しい課題を取り入れ、発展していくような単元の指導を計画していきましょう。



### 一度覚えたやり方を守って活動するのが得意

自閉症の児童・生徒の多くは、一度覚えたやり方をしっかり守って活動することが得意です。逆に一度覚えたやり方を、全く違うやり方に変えられてしまうと混乱してしまいます。最初から正しいやり方を教え、そのやり方で児童・生徒が課題を達成し、充実感を味わうことのできるような指導計画・指導方法で授業を展開していきましょう。

### 視覚的な情報提示に対する理解の方が得意

自閉症の児童・生徒の多くは、言葉で聞いて理解することよりも、目で見えて理解することの方が得意です。言葉による提示のみに頼らずに、必要に応じて絵・写真・身振り・手振りなどの視覚的な情報をあわせて提示して、理解を促していきましょう。この報告書の中には、この視覚的な情報提示に関するアイデアがたくさん掲載されていますので、ぜひご活用ください。



### 動作や操作を伴った学びの方が得意

自閉症の児童・生徒の多くは、視覚的な情報提示とともに、話を聞いて学ぶ、いわゆる座学よりも、目と手を使って物を操作しながら学ぶ方が得意です。一人一人の理解に合わせて、個別に教材・教具を用意し、動作や操作を伴う課題に取り組めるような授業のスタイルを目指していきましょう。

## 「苦手」に配慮する

自閉症の児童・生徒が一般に苦手とするところは、授業の中で配慮できるよう、あらかじめ対応を考えましょう

### 対人関係形成の困難さを配慮する

自閉症の児童・生徒の多くは、他者と柔軟にやり取りをすることや、その場のルールを理解して自分の行動を調整するなど対人関係を形成するのが苦手です。友達や先生とどのようにかかわったらよいのか、今はどのようなルールで活動しなければならないのかを、場面に合わせて伝えていく必要があります。



### コミュニケーションの困難さに配慮する

自閉症の児童・生徒の多くは、話し言葉を用いたコミュニケーションが苦手です。視覚的な情報の提示の仕方を大切にするとともに、児童・生徒の側からも意志を発信しやすいように、サイン言語やカード等を用いたコミュニケーション手段の確立にも取り組んでいきましょう。

### 感覚の過敏さに配慮する

自閉症の児童・生徒の多くは、大きな音が苦手だったり、服が汚れることが苦手だったり、様々な感覚の過敏さがあります。このような時には、CD等の音量を下げる、ノイズキャンセラー付きのヘッドフォンを用意する、汚れた時用の着替えを用意するなどして、過敏さを配慮していきましょう。



### 同時に複数の情報を処理することの困難さに配慮する

自閉症の児童・生徒の多くは、同時に複数の情報を処理することが苦手です。指示を細かく区切って、一つできたら次の活動の指示を出すなどして、児童・生徒が今やらなければならない活動に集中して取り組めるようにしましょう。

これらの得意、苦手は、自閉症の児童・生徒一人一人によって、その現れ方が異なります。児童・生徒の実態をよく観察して、どのような配慮が必要なのかを考えていきましょう。

また、これらの配慮事項等は、担任だけでなく、学校全体で共有して、実施できるようにしましょう。